

橋本淳司著「100年後の水を守る―水ジャーナリストの20年―」文研出版 2015年6月30日刊を読む

自分の考えや経験を文章にまとめる意義とは

1. 自分の考えや経験を文章にまとめる意義は、主に2つあると思います。
2. 1つは、「内なる混沌に秩序を与えること」です。自分のなかにぐちゃぐちゃにつめこまれている、事象、知識、経験、意見、そのほかの感情などを整理整頓して明らかにすることです。
3. そして、もう1つは、社会貢献です。『後世への最大遺物』（内村鑑三著／岩波文庫）という本があります。内村鑑三の講演を活字にしたもので、文庫本でわずか59ページと短いものですが、「普通の人にとって実践可能な人生の生き方とは何か」「我々は後世に何を遺してゆけるのか」をテーマに語られ、明治時代に「多くの人がこの書を読んで志しを立てた」ことで知られます。さすが、「心の灯台」と異名をとる人です。
4. この本のなかに、
「私に50年の命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河、これらに私が何も遺さずに死んでしまいたくはない」という記述があります。この言葉は、ぼくに大きなインパクトをあたえました。
5. さらに、「何を遺したらいいか」についても語っています。
内村鑑三は、だれにでも遺すことのできる本当の最大遺物を「勇ましい高尚なる生涯」と結論づけているのですが、遺す価値はあるが、だれにでもできるものではないものとして、「金」「事業」「思想」をあげています。
6. ぼくのアンテナにひっかかったのは「思想」でした。
7. 思想というと壮大なように感じますが、日々の経験と知識を結晶させた知恵を文字として残すことは、周囲の人、後世の人の役に立つことです。
8. 内村鑑三は、文章を書くことはだれにでもできることではないと言っていますが、それは、明治時代の社会、教育を基準にした発言です。
9. すべての人が一定の教育を受け、自由な情報発信ができ、パソコンなどの道具も整った現代なら、ちょっとしたコツさえわかれば、だれでも文章を書くことができます。だれでも社会貢献ができるでしょう。ぜひ、チャレンジしてみてください。
10. ぼくの好きな言葉の1つに、「本は遅効性のメディアである」というものがあります。これは 10

年くらい前、ノンフィクション作家の佐野真一^{さのしんいち}さんに教えてもらった言葉です。

11. 本を読みます。そのときは大きな気づきは得られなくても、ずっとあとになってから、内容の真意に気づくことがあります。「あれは、こういうことだったのか……」と。
知らず知らずのうちに、自分の考え方の^{きばん}基盤となっていることもあります。
12. 子どものころに読んだ本に書かれていたことが、大人になってからの^{まよ}迷いや苦しみに光を当ててくれることもあります。
13. 本はゆっくりと^き効くのです。^{そっこうせい}即効性はありませんが、体のなかに入り、じんわりと、そしてしっかりと効いてくるのです。それゆえ「^{ちゆうせい}遅効性のメディア」なのです。
14. 最近ではネットなど即効性のメディアが主流になっていますが、即効性を^{じゅうし}重視すると、後に残ることが少ないように思います。本を読むと、そこで得た知識や考え方が、時を経るうちに体内で自然と^{はっこう}発酵し、心を育てていくのだと思います。
15. 本が遅効性のメディアであると考えれば、長く読まれる本を後世に遺すことはとても意義深いものであると感じます。
16. 本書もあなな^{いってき}の心のなかに一滴のしずくのように落ち、ゆっくりとしみわたり、いつか気づき、考えるきっかけとなったなら、これほどうれしいことはありません。

P.159 ~ 162

<コメント>

- (1) 本書の最終章である「おわりに」の文章は、「自分の考えや経験を文章にまとめる意義」や本を読むことの意味がとてもわかりやすく示されている素晴らしい文章と考えます。
- (2) 水ジャーナリストとして、水課題を抱える国内外の現場の調査に基づき情報発信をし、同時に、国や自治体への水政策の提言、子どもや一般市民を対象とする授業なども行う橋本淳司氏の本書から現代社会が学ぶことは多い。是非、御一読を。
- (3) 本書を御紹介頂いた不動産鑑定評価・調査会社、株式会社三友システムアプレイザル取締役相談役で、橋本氏と学習院大学で同窓の井上明義氏に感謝いたします。

— 2016年3月2日(木) 林 明夫記 —